

ランプの影

正岡子規

青空文庫

病やまいとこしの牀とこしに仰向やまいとこしに寐とこしてつまらなさに天井てんじょうを睨にらんで居ると天井板てんじょうばんの木目きもくが人の顔かおに見える。それは一つある節穴せつあなが人の眼まなこのように見えてそのぐるりの木目きもくが不思議ふしぎに顔かおの輪廓りんがくを形かたちづくつて居る。その顔かおが始終目しじうめについて気きになつていけないので、今度は右向みぎむきに横よこに寐とこしると、襖ふすまにある雲形うんがたの模様もようが天狗てんぐの顔かおに見える。いかにもうるさいと思おもうてその顔かおを心こころで打ち消くして見ると、襖ふすまの下したの隅すみにある水みづか何かなにかのしみがまた横顔よこがたの輪廓りんがくを成なして居る。仕方しほうがないから試たまに左向ひだりむききに寐とこして見るとガラスがらすごしに上野じやうのの杉すぎの森もりが見えてその森もりの隙間すきまに向むかうの空そらが透すいて見える。その隙間すきまの空そらが人の顔かおになつて居る。丁度画探ていどがたんしの画がのようようで横顔よこがたがやや逆さかさになつて

見えるのは少し風変りの顔だ。再び仰向になつて、今度は顔のな
い方の天井の隅を睨んで居ると、馬鹿に大きな顔が忽こつぜん然と現れ
て来る。

かように暗裏の鬼神を画き空中の楼閣を造るは平常の事である
が、ランプの火影に顔が現れたのは今宵こよいが始めてである。

『ホトトギス』所載の挿画

年の暮の事で今年も例のように忙しいので、まだ十三、四日の
日子にっしを余して居るにもかかわらず、新聞へ投書になつた新年の俳
句を病牀で整理して居る。読む、点をつける、それぞれの題の下
に分けて書く、草稿へ棒を引いて向うへ投げやる。それから次の



草稿へ移る。また読む、点をつける、水みず祝いわいという題の処へ四、五句書き抜く、草稿へ棒を引いて向うへ投げやる。同じ事を繰り返して居る。夜は纔わずかに更ふけそめてもう周囲は静まつてある。いくらか熱が出て居るようでもあるが毎夜の事だからそれにも構わず仕事にかかつて居る。けれども熱のある間は呼吸が迫るので仕事はちつともはかどらぬ。そのみでない蒲団の上に横になって、右の肱ひじをついて、左の手に原稿紙を持って、書く時には原稿紙の方を動かして右の手の筆の尖さきへ持つて往てやるといふ次第だから、ただでも一時間か二時間かやると肩が痛くなる。徹夜などした時は、仕事ですんでから右の手を伸ばそうとしても容易に伸ばす事が出来んようになってしまう。今日も昼からつづけさまに書いて

居るので大分くたびれたから、筆を投げやって、右の脇ひじを蒲団の外へ突いて、頬ほおづえ杖をして、暫く休んだ。熱と草臥くたびれとで少しぼんやりとなつて、見るともなく目を張つて見て居ると、ガラス障子の向うに、我枕元にあるランプの火の影が写つて居る。もつともガラスとランプの距離は一問余りあるので火の影は揺れてやや大きく見える。それをただ見つめて居ると涙が出て来る。すると灯が二つに見える。けれどもガラスの疵きずの加減であるか、その二つの灯が離れて居ないで不規則に接続して見える。全くの無心でこの大きな火の影を見て居るとその火の中に俄にわかに人の顔が現れた。見ると西洋の面に善くある、眼の丸い、くるくるした子供の顔であつた。それが忽ち變つて高帽の紳士となつた。もつとも帽の

上部は見えて居らぬ。首から下も見えぬけれど何だか二重廻しにじゅうまわを著て居るように思われた。その顔が三たび変つた。今度は八つか九つ位の女の子の顔で眼は全く下向いて居る。額ひたいぎわ際わの髪にはゴムの長い櫛くしをはめて髪を押さえて居る。四たび變つて鬼の顔が出た。この顔は先日京都から送つてもろうた牛祭の鬼の面に似て居る。かようにして順々に變つて行く時間が非常に早くかつその顔は思わぬ顔が出て来るので、今度は興に乗つてどこまで変化するかためして見んと思いはじめた。まるで見せ物でも見るような氣になつたのだ。そう思うとそれから変りようがやや遅くなつた。

その次には猿の顔が出た。それが西洋の昔の学者か豪傑かの顔

と変った。その顔は少し横向きで柔かな髪は肩まで垂れて居る。

極めて優しい顔であるがただ見たように思うだけで誰の肖像か分らぬ。それから暫くは火が輝いで居るばかりで何の形も現れて来ぬ。なお見つめて居ると火の真中に極めて明るい一点が見えて来た。それが次第に大きくなって往く。終に一つの大目玉が成り立つた。それが崩れるとまた暫く何も出来ずに居たが、ようよう丸まるまげまのまがま現まれた。その女の鬢びんが両方へ張つて居るのは四方へ放つて居る光線がそう見えるのである。その光線の鬢は白くまばらななのでな石せ膏つ細こ工うの女かと思われた。この女は初め下向いて眼まをま塞ふいで居たが、その眼を少しずつ明けながらその顔を少しずつあげると、段々すさまじい人相になって、遂に髪さの逆立さんつたぼ三ぼ宝う

荒神こうじんと變つてしもうた。荒神様が消えると耶蘇ヤソが出て来た。これは十字架上の耶蘇だと見えて首をうなだれて眼をつぶつて居るが、それにもかかわらず頭の周圍には丸い御光が輝いて居る。耶蘇が首をあげて眼を開くと、面頬めんぼおを著つけた武者の顔と變つた。その武者の顔をよくよく見て居る内に、それは面頬でなくて、口に呼吸器を掛けて居る肺病患者と見え出した。その次はすっかり變つて般若はんにゃの面が小さく見えた。それが消えると、癩病らいびの、頬のふくれた、眼を剥むいだのような、気味の悪い顔が出た。試にその顔の恰好かつこうをいうと、文学者のギボンの顔を飴細工あめでこしらえてその顔の内側から息を入れてふくらました、というような具合だ。忽ち火が三つになつた。

何か出るであろうと待つて居るとまた前の耶蘇が出た。これではいかぬと思うて、少く頭を後へ引くと、視線が變つたと共にガラスの疵きずの具合も變つたので、火の影は細長い鍵かぎのような者になつた。今度はきつと風變りの顔が見えるだろうと見て居たけれども火の形が變なためか一向何も現れぬ。やや暫くすると何やら少し出て来た。段々明らかになつて来ると仰あおむけ向に寐た人の横顔らしい。いよいよよそうときまつた。眼は静かに塞いで居る。顔は何となく沈んで居いて些いささかの活気もない。たしかにこれは死人の顔である。見せ物はこれでおやめにした。

〔『ホトトギス』第三卷第四号 明治33・1・10〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三卷第四号」

1900（明治33）年1月10日

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正・・noriko saito

2010年5月19日作成

2012年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ランプの影

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>